
「傀儡外伝」

強者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「傀儡外伝」

【Nコード】
N2536V

【作者名】
強者

【あらすじ】
小説、「傀儡」の外伝。

「誕生」

生き残りの傀儡 「小川 愛美」 事、「てんてん」の存在・

「死」を迎えていない最後の傀儡

「綾瀬 千佳」から始まり

「竹内 美央」の死の連鎖・・・

とある場所に隔離されている「愛美^{てんてん}」の物語・

京介が不在の中・・・動いた人間はいつたい誰なのか・・・

傀儡が生み出す呪縛をご覧ください・・・

この小説は、「傀儡」と言う小説の外伝となります、先に傀儡をお読みになってから見ていただけると幸いです

傀儡外伝 「誕生」

「愛美、全てが終わったら一緒になろう．．強くなれよ．．．」

「はい．．キラー様．．．」

．
．
．
．
．

「株式会社 MIO」でも飛び降り事件の惨劇は全国的なニュースになった

飛び降りた肉体は誰か詳細が分からないほど肉体がバラバラになり

身元不明の死体として処理された

「謎の飛び降り死体。？ M I Oとの関係は？都内での謎の爆発との関係はあるのか？」

各新聞の見出しは記事を飾った

「バサッ」

「・・・京介さん・・・」

ジャニスは自分の持ち得る力を最大限に使い事件の解明の妨害工作を行った

京介と判別できる資料をこの世から全て消し去った

長い間、京介と共に歩んだ影の道・・・

未だその傷跡は深く残り

過去に作られた傀儡達が地下室に補完されていた・・・

皆、精神コントロールまでは行きつかず「性」の玩具となり

裏では競売にかけられ、その後、飼い主によって処分されるものもいた・・・

『X・・・。地下の傀儡達にこれを・・・』

数十個の薬を渡した・・・

『これは・・・』

『京介さんからの・・・いや、彼の意思の元に・・・だ・・・』

『色々と問題になるのでは・・・』

『大丈夫だ・・・俺達の知らない所で京介さんが全て手を打ってくれているようだ・・・』

『京介さんが・・・』

『ああ・・・彼の意思に従うんだ・・・』

『分かりました』

ジャニスが渡した薬は 安楽死の薬であった

地下に残された数体の傀儡達は薬により苦しむことなく安らかに眠った・・・

その後、遺体は地下室の更に深い穴を掘り、埋めてコンクリートを流し込んだ・・・

ジャニスは傀儡達に線香を上げた・・・

京介のシークレットルームへ行つた

「ガチャ・・・」

室内は綺麗に片付けられていた・・・

美央を監視するために付けられたモニター数個も外され部屋の隅に
山積みになっていた

灰皿にはタバコの吸い殻が数本あつた・・・

ソファーに座り京介の吸い殻をぼんやり見つめた・・

ジャニスは京介のシケモクをくわえ火を点けた・・

「・・・傀儡・・・か・・・」

ソファーの前の大きなガラスケース・・

そこには花に囲まれ冷凍保存されている「綾瀬 千佳」

ジャニスは立ち上がり千佳の傍へ行ってみた

ガラスケースには心拍計も装置してあった・

「こんなものまで付けていたのか・・・」

京介にとって、この「綾瀬 千佳」が全てを変えてしまったのかも
知れない・・・

そんな風にも感じた・・・

心拍系は音を出す事もピクリと動く事も一度も無かったようだ・・・

「・・・君も・・・被害者だったんだな・・・」

ジャニスは千佳の顔を見上げた・・・

「・・・何っ？・・・これは・・・」

「誕生」

2

心拍もしていない千佳の目から涙がこぼれていた・・・

「・・・そうか・・・君も京介さんの元へ行きたいんだな・・・」

ジャニスは京介のシークレットルームを閉鎖し、部屋全体をコンクリートで埋める事にした・・・

「大事・・・だったな・・・彼女の口癖は・・・」

千佳の眠るケースの冷凍装置のスイッチを切った・・・

「力チ・・・」

地下の通路を歩いている時、京介から渡されたメモ用紙の事を思い出した・・・

ポケットの中にくしゃくしゃになって入っていた紙を取り出した・・・

「ここに何か秘密が隠されているのかもしれない・・・」

そこには地方のある病院の名が書かれていた・・・

ここに「^{てんてん}愛美」が居る・・

残された傀儡が居る場所・・

病院名の他に、京介からの暗号めいた文字が書かれていた・・

「
・・・
」

ジャニスはH E A V E N S本部事務所へ行き、京介の使っていたP
Cへアクセスした

そこにはパスワードが入力されるようになっており京介の暗号めいた文字を入力してみた・・

パスワードは承認され画面が変わった・・

そこには愛美の姿が表示されていた・・

「動画か・・・？」

よく見ると、そこに表示されている日時はリアルタイムのものである事が分かった・・

「彼女は・・・生きている・・・健全な体なのだろうか・・・」

映し出される愛美は病院のベッドに寝ている姿で時折を誰かと話をしているようだった・・・

「京介さんは・・・愛美を監視していたのか・・・それとも何かプランがあったのだろうか・・・」

動画を閉じるともう一つのファイルがあった・・・

「カチ」

そのファイルを開けた・・

「ジャニス。このファイルをお前が開ける事を願い、これを残す。

千佳は安らかに眠らせてくれ

「愛美は・・・・」

愛美についての京介の考えが書かれていた・・・

「京介さん・・・あんたが・・・あんたが・・・一番の傀儡だったよ・・・」

「なのに・・・俺は・・・」

メモ用紙をぐしゃっと握りつぶした・・・

ジャニスは上着を羽織り、すぐに事務所を出た・・・

小川 愛美^{てんてん}は京介の元から離れて半年が過ぎようとしていた・・・。

病室では「？ M I O」での飛び降り自殺、都内の爆破事件が何度もTVで流されていた

「・・・」

『小川さん、検診の時間ですよ』

看護婦がいつもの様に検診をしにきていた

「
・・・
」

愛美は窓の外を眺めるだけであつた・・・

「これが終われば一緒になる・・・一緒になる・・・強くなる・・・
」

『さあ、行きましょうね』

看護婦は愛美の言葉を相手にする事無く診察室へと連れて行った

・
・
・
・
・
「東京駅」

京介のPCのファイルの中にはあるコインロッカーの場所と鍵の置き場が記載されていた。

「ここか・・・」

データに記載されたロッカーナンバーを探した

「4542・・・死後死人・・・まさかな・・・」

「カチ・・・」

ジャニスは駅のコインロッカーを開けた

中には、中くらいのカバンが一つあった

「・・・これは？」

ジャニスはもしかしたらとんでもない物かもしれない・・・駅を離れた

人気のビルの裏路地で鞆を開けてみた

「ジー・・・」

カバンの中には沢山の現金、通帳、ハンコ。そして2通の手紙があった。

一通は「愛美」宛

もう一通は

「ジャニス宛」だった

「・・・私宛てに・・・？最初からこうなると考えていたのか・・・」

沢山の疑問が浮かんだ・・・

自分の死を予測・・・いや・・・覚悟をしていたのか・・・

このカバン類の仕込みはいつ行われたものなのか・・・

もしや・・・生きているのでは・・・

ジャニスは空を見上げた

「京介さん・・・あんた本当に死んだのかい・・・」

・

・ ・ ・

それから数時間後、ジャニスは東北新幹線に乗っていた

京介の指示により、愛美の安否を考え東北へ身柄を隠したのだった

「メモに記載されていたのは、その病院の名前だった」

もし、ヒロシにてんてんの居場所が分かっ
てしまえば確実に殺されて
いた

こうまでして彼女を守ったのは何故か・・・

「本当に・・・綾瀬 千佳 以来の京介さんは、まるで自分が傀儡の
ようだった・・・」

千佳だけではなく・・・愛美へも依存をしていた・・・いや・・・傀儡に
取りこまれたのだろうか・・・」

窓の外を眺めた・・・

流れる景色の中、ジャニスは自分の中の知り得る京介に聞いた

「京介さん・・・一体・・・あなたは何を考えていたんだ・・・」

「・・・」

新幹線がトンネルに入った

暗闇の中を走る窓の景色に自分の顔が写った

「・・・？」

ガラスに写る、京介の姿・・・

京介はポケットに手を入れた・・・

トンネルから新幹線が出た・・・

「フラッシュバックか・・・幻か・・・」

ジャニスは何気にポケットに手を入れた

「カサ・・・」

ジャニスは手紙をポケットに入れていたのを思い出した

「・・・手紙・・・を見ると言うのか・・・」

手紙の封を開けた・・・

その内容はジャニスの知る、京介では無いような文面だった

「ジャニス、この手紙をお前が読んでいると言う事は、きっと俺は今この世に居ないと言う事になるだろう」

愛美はとても過ごした時間の短い傀儡だった。そんな中、彼女は自分の夢を語り、夢を捨て、夢を見た。

大きな衝撃に耐えられる様に強くなれと言い続けたのだが、それはやはり困難だったようだ。

だが、あの時点で有名人の「てんでん」として愛美を抹消する事は不可能だった。

それだけでは無く、俺は彼女の想いを考えてしまった

千佳を失った後だけに傀儡を傀儡として見ていく事に

多少の疑問を感じ始めたんだ・・・

今考えるとあの時から俺は傀儡に取り込まれ始めていたのかも知れない。

ジャニス、愛美をよろしく頼む、彼女は最後に残る傀儡となるだろう。

正気で居るならば、彼女に何かしらの協力をしてやって欲しい。

もし、異常を来しているのならば、お前の判断で、その時は抹消してやって欲しい

彼女の為にも・・・

追伸、

この金は愛美に渡してやってくれ、もともとは彼女の物だ・・・。」

「・・・。」

ジャニスは自分宛の手紙を読むとぼんやりと外を眺めた・・・

「
・・・
」

・
・
・
・
・

「
山形駅
」

車内の放送は山形に着いた事を知らせた

ジャニスは山形で降りた・・・

「らしくねえよ・・・京介さん・・・」

ジャニスはジャケット内ポケットの中に手を入れた

「カラカラ・・・」

ジャニスの手の中には、

他の傀儡達に飲ませた「安楽死」用の薬が入っていた

駅前を多少歩いた・・・

「こうして、一人でこんなところまで来るのは何年振りだろうな・・・」

寒空に舞う 粉雪がジャンニスの頬を凍てついた・・・

胸の奥に納得しきれない気持ちがあった・・・

「京介さん・・・あなたは**お強い人**なはずだ・・・」

手を上げてタクシーを止めた・・・

o

「誕生」 3

ジャニスはタクシーの中、愛美の詳細を考えていた・

メモに書かれていた病院は10分少々で着くらしい・

本人を見てから判断した方がいいのか・

他の傀儡達同様に処分をするべきであろうか・

そして・京介は何を望んでいたのか・

生かしたとしたら・

処分をしたとしたら・・・

『お客さん、着きましたよ』

『・・・はい』

ジャニスは金を置き病院に入った・・・。

ジャニスとしては、愛美に対し特別な想いは無い・・・

「ガサッ・・・」

メモ用紙を出した

メモには病室の番号も書かれていた

ロビーを抜けエレベーターに乗った

「カチ・・・」

エレベーターが昇る中、ポケットの中の薬を確認した

「これを使う確率の方が高いだろう・・・下手に意識があっても困るだけだ・・・」

エレベーターは 8階で止まった

「ガーッ」

「コッ・・・コッ・・・」

「ここか・・・」

部屋は一人部屋だった・・・

「・・・」

ノブを握ろうとした時、中から声が聞こえてきた

『良かったですね、体の方はスッキリ元気になって』

『ええ、お陰さまで』

『それで・・・どうなれるんですか？』

『・・・どうって・・・言われても・・・本人の意識が・・・』

『・・・まだ どちらにしても、まだ考える時間がありますので、
良く考えて下さいね』

『ええ・・・事態が事態なので・・・今は・・・』

部屋から人が出てきそうな気配を感じたジャニスは病室を離れた

看護婦が出て行った・・・

病室から聞こえていた会話は、愛美と看護婦ではなさそうだ・・

愛美以外と会うのは少し不味い・・

時間を開けて一人になるのを待とう、そう考えた

すると、数分も経たないうちに母親らしき女が病室から出て来た

女はエレベーターに乗り、下へ向かったようだった

「今しかないな・・・」

病室へ行った

「コンコン・・・」

「・・・」

中からは声が聞こえなかった

「ガチャ・・・」

部屋に入ると一人の女が寝ていた

「小川 愛美・・・」

あの一世風靡した、女優「てんてん」がベットに寝ていた・・・

病室には、愛美、意外は誰もいなかった

ジャニスは傍に行った

愛美はジャニスが近寄っても、窓の外を眺めていた

『愛美・・・』

『・・・』

『てんてん・・・』

静かにゆっくりジャニスの方に顔を向けた

『
・
・
・
』

瞬きをゆっくりしながら、じつとジャニスを見つめてきた・
・

『てんでん・私が分かるか?』

『
・
・
・
』

色々と話してみたが全く反応が無く、ただジャニスを見つめるだけだった・・

「このまま生かしておいても・・」

点滴に薬を混ぜよう・・そう考えた

「ガチャ」

『あら？どちらさん？』

愛美の母親らしき人間が入ってきた

「ちっ・・・今日の所は様子見だ・・・」

『・・・ああ・・・見舞いに来たのですが・・・』

『愛美のお知り合い？よくここが分かりましたね・・・』

『ええ・・・』

『あんな事があつたから・・・隠れるようにここへ・・・』

『お気持察します・・・、実は愛美さんに渡さなければならぬ物があつて見舞いを兼ねてお邪魔しました』

『ありがとうございます・・・私は、愛美の母親です。・・・渡すものとはいったい何ですか？』

やはり母親だった・・・

何処か警戒心があるようだ・・・

無理も無い、全世界へ向けて発信させられた　あの映像がそうさせているのだろう・・・

ジャニスは京介から預かってきたカバンを渡した

『これを・・・』

愛美の母親はカバンを受け取った

『見ていいのかしら・・・変な物が入っていると言っ事はないですよ
ね？』

『変な物ではありませんよ・・・ご安心ください』

母親は少し疑心難儀な顔をし、鞆のファスナーを開けた

「ジイー」

鞆の中には現金の山・・・

『この・・・お金は・・・？』

『このお金は、ある方から預かっていたものです。その方が言うには、愛美さんのお金だと聞いてます・・・』

『この娘の・・・？』

『ええ・・・芸能活動で稼いだものだ・・・』

『こんなに・・・』

『中に手紙入っています、愛美さん宛てにその方からのメッセージが書かれていると思います・・・私は見てませんが・・・』

母親は手紙を取り出した

ジャニスは愛美を眺めた・・

愛美は窓を外を眺めている・・・

とても正気とは思えなかった・・

『愛美さんの様態はどうなんですか？』

『この娘は・・・体は元に戻ったんですけど・・・』

ジャニスは横目で母親を見た・

『何か？』

『意識が・・・』

『何も感じない・・・のですか？』

『ええ・・・耳は聞こえてるみたいなんですけど・・・』

『・・・そうですか・・・無理も無いですね・・・あんな事があれば・

『・』

『それと・・・ひとつ 問題が・・・』

『問題？』

『・・・ええ・・・』

『差し支えなければ・・・』

『妊・・・娠・・』

『この娘・・妊娠してるんです・・』

o

「誕生」 4

数ヶ月前 都内某所・・・

愛美は今後の芸能活動について考えていた

いまやテレビを付けて自分が映ってない日は無い

目標であった、グラビア、CMなども？ MIOとの契約で叶った

遥か頭上だったと思っていた目標も意外と早く達成した

？ MIOの会長、闇田 ヒロシのバックアップもあり、会社の経営までしている

その会社は芸能プロダクション

いつまでも自分も若い訳ではない、次々に出てくる新人を上手い事プロデュースして会社を運営していく

？ MIOとの付き合いを辞めなければきっと、何年か先までは上手く行く・・・

もし、切れてしまったとしても、事前に自分が新人を連れて営業にまわれれば何とかなる

愛美は芸能活動の先と方向性を考えていた

『ねえ、京ちゃん』

『何や』

『考えたんだけど・私、そろそろ引退したい』

『今はあかん言つたやる』

『また・・プラン？』

『そうや・・』

ブラックコーヒーを飲みながらタバコを吹かす京介

『あのね、京ちゃん』

『?』

『愛美は京ちゃんのアドバイスもあって、夢が叶ったの』

『夢?』

『うん、芸能界も、もういいかなって思っているんだ』

『・・・会長さんは世界へ向けてお前を売りだそうと思っているらしいやんか』

『うん・・・そんな話もされて入るけど・・・それって・・・幸せなのか？』

『・・・会長に取っては幸せな事やろな・・・奴は金しか見てないからな』

『うん・・・私はあの人の為にお金を稼がなければならない訳じゃないじゃない』

『そやな』

『私は世界とかお金とかはどうでもいいの』

『有名になりたくて芸能界に入ったんちゃんか？』

『確かに・・・最初はそうだったけど・・・今は違う』

『・・・』

愛美は京介の顔を見た

何かを考えている・・・

私に向ける言葉なのか・・・

今後の方向性の事なのか・・・

『なーんてね、嘘！』

『嘘？』

『うん、私はもっともっと頑張って沢山お金を稼ぐ』

『・・・』

『そして・・・世界で一番豪華な結婚式をする』

『結婚式？』

『うん、京ちゃんと（＊、＊）』

『・・・そうか・・・そんな事考えてたんか・・・』

『うん　いいでしょ？』

『ああ・・・』

窓の外を見ながら答える京介に愛美は自分だけが愛しているのではないか、と言う不安が込み上げた

『ねえ・・・京ちゃん』

『なんや?』

『京ちゃんにとって私の存在って何かな?』

『大事な人間や』

『大事って事は・・・将来は望めるの?』

『・・・恐らくな・・・』

『私はプランだけの為に存在するわけではないよね・・・』

『そんな訳・・・無いやろ・・・』

『信じていいの・・・?』

京介は数秒間、考えて答えて来た

『強くなれ・・・そうすれば・・・きっと一緒になれる』

『強く・・・』

『そうだ』

『強くって・・・どんな風に?』

『何があっても・・・俺を信じる事だ』

『今でも信じているもん!』

『今よりもや・・・』

『何が足りないの？何をどうすればいいの？』

・
愛美は不安に押しつぶされそうになり我慢していた涙が溢れ出た・

『私は、将来を見たいの・・・もし、自分が芸能界を辞めても生活は出来るように先も考えてる、それと同時に幸せにもなりたいの！』

『幸せ・・・』

『私・・・京ちゃんの前では・・・てんてんじゃないんだよ・・・普通の・・・女の子なんだよ・・・』

『・・・』

『幸せになりたいじゃん・・・そう言うのって・・・考えたら駄目なの？』

京介は愛美の言葉を聞くと、少し目を大きくして驚いているようだった

普段から、京介に意見を言う事などなかったからだろう

少しでも京介に嫌われたくない・

京介に愛されたい・・そう言う気持ちから、愛美はそうしていたからだ

『愛美・・・お前・・』

『えっ・・えっ・・えっ・・』

我慢していた涙が溢れ出た・・

「こんな事を言いたかったんじゃない・・ただ、いつまでも一緒に居たい・・それだけなのに・・」

京介は愛美に近づき抱きしめてきた

『いや!・・いや!』

愛美はこんな自分に同情して抱きしめてきているんだ・・そう感じていた

『愛美・・・』

尚も強く抱きしめてきた

『辞めて・・・その気がないなら・・・抱きしめないで・・・』

か細く小さな声だった・・・

『そうか．．．』

京介は愛美を放した

『．．．』

窓を再び眺めながら言った

『今なら．．．辞める事が出来る．．．』

『えっ・・・何を・・・』

『プランだ・・・お前の将来だけを考えるのであれば・・・それが一番の方法だ・・・』

『それは・・・可能なの・・・？』

『可能さ・・・プランを進行しなければいいだけだ』

『それでいいの？』

『それはお前が決める・・・』

京介が不本意である事は分かっていた・・・

『私が・・・』

『そつや・・・』

『もし、辞めたら・・・京ちゃんは・・・どうなるの・・・？』

『お前の前から姿を消すまでや』

『えっ・・・』

『正確に言つと暫くの間は会えないと言つ事になるだろう・・・』

『どうして・・・』

『お前の齒車を止める事は出来ても、他の齒車は回っている・・・
お前をプランから外して終わる訳ではないんや・・・』

何か大きな事が起きる予兆を感じた・・・

『一体・・・何を仕出かそうとしているの・・・』

『・・・破壊だ・・・』

『破壊？』

『そうだ・・・腐った呪縛の連鎖をだ・・・』

『破壊が終わったら・・・全ての終わりなの？』

『そっや・・・全てが・・・終わる・・・』

暫くの沈黙があつた・・・

「京ちゃん・・・私・・・」

「誕生」 5

『京ちゃん・・・私・・・』

愛美は京介の背中にしがみ付いた・・・

京介はタバコ吹かした・・・

「フー・・・」

『愛美・・・無理せんでもええねんど・・・』

『・・・』

『確かに・・・お前は最高の打撃を食らわせれるだろう・・・』

『それは・・・どこに?』

『? MIOや・・・』

愛美の脳裏には「? MIO」の今までの仕事や「竹内 美央」の顔が過ぎった・・・

『えっ・・・それは・・・』

愛美の考える、今後のプランにも大きく影響する・・・

あの会社が何かしらの打撃を喰らうとしたら・・・共倒れになる・・・

『そんな事をしたら・・・私まで・・・』

『だろ・・・せやから・・・お前は降りろ・・・』

京介は最後の忠告を入れた

愛美は暫く黙りこんでしまった・・・

京介は下を俯き涙を流す、愛美に言った・

『プランの事は考えんでもいい、お前が降りようが降りまいが・
下される鉄槌は変わりはない・ただ期間が延びるだけや・・・』

『私は・・どうすれば・・』

『強くなるしかない・・何ものにも耐えられる精神を保つんだ・・』

『・・・やるわ・・私・・』

愛美は決意した・・・

自分が抜けても抜けなくても、結果は一緒・・・

自分が加わる事によって時期が早まる・・・

と言う事は・・・京介との時間も早く訪れる・・・

『愛美・・・ほんまにええのんか・・・』

『うん・・・約束して・・・愛美を愛美を見捨てないで』

『ああ・・・約束する・・・』

京介は愛美を抱きしめベットへ運んだ・・・

その日の愛美は少女のようだった・・・

体を硬直させ

顔を真っ赤にした

涙を流しながら、何度も京介を求めた・・・

不安を体でかき消すように・・・

『京ちゃん・・・中で・・・奥に・・・』

『ああ・・・』

京介は愛美の体内の奥で脈をうつた・・・

「ビクン・・・」

二人はそのまま、何時間もベッドの中で求め合った・・・

その翌日だった・・・

事件が起きたのは・・・

o

「誕生」 6

愛美の母は何か思いつめるような顔しながら言った・・・

『妊娠ですか・・・？』

『ええ・・・運ばれてきた時には分からなかったんですけど・・・ここ
で治療をしている内に、それが分かったんです・・・』

涙を溜め、どうして良いのか分からないと言ってきた・・・

『・・・どうするつもりですか？』

『どうするって・・・言われても・・・このままでは、もし産んだとしても本人が育てる事は難しいかと・・・』

『・・・そうですか・・・』

『中絶するのが・・・本人の為にも赤ちゃんの為にもなるかと・・・』

『・・・』

ジャニスは愛美を見つめた

話を聞いているのか・聞こえているのか・

どうかは分からないが・悲しげな表情にも見えた・

『愛美さんの体は健康体なのですか？』

『体の方は・・・もう回復したようです・・・』

力無く答えて来た・・・

『何ヶ月ですか？』

『まだ3カ月と・・・』

「どちらにしても間に合うか・・・」

ジャニスはそう思った

『どうしたらいいんでしょう・・・意識さえハッキリしていれば本人に決めさせたいんだけど・・・』

『・・・』

『それと・・・子供の父親が誰か・・・私には分かんなんです・・・
せめて・・・愛美が普通の状態であれば・・・』

『・・・父親・・・ですか・・・それは・・・恐らくその手紙の主だと思
います・・・』

『本当ですか!?!』

『ええ・・・残念ながら・・・本人は他界されていますが・・・』

『えっ・・・なんて・・・可哀想なの・・・この娘・・・』

愛美の母は娘を不憫に思った・・・

こんな状態になった上、妊娠していて、しかも子供の父親は死んでいる・・・

この現実を受け止めきれなかった・・・

『そんな事があつたんですね・・・それで・・・この子・・・』

ジャニスは母親をじっと見つめた

『愛美ちゃん・・・あなたの事は私がずっと守ってあげるからね・・・』

愛美の身体にしがみ付き、号泣した・・・

ジャニスは、何れにせよ・・・この状態ではどうしようもない・・・

日を改めるか・・・人氣が無くなった時に薬を混入するか迷った・・・

『お母さん、あまり気を落とさないでください・・・本人は生きています・・・きっと・・・意識は戻りますよ・・・』

慰めにも似た言葉を掛け病室を出ようとした・・・

ジャニスが立ち去ろうとした時、てんてんの母は深々と頭を下げてきた・・・

『・・・』

何も知らないが故　良い人と感じたのだろう・・

そう思うと、とても可哀想な人間にも見えたと同時に真実は知らない方がよい・・

これが傀儡がもたらす呪縛なのだと・・感じた

振り返り　一礼をし立ち去ろうとすると・・・

『この手紙・・一緒にこの娘に聞かせてやってもらえますか・・・』

京介からの手紙を差し出してきた

『いえ．．私にはそんな権利は．．』

『貴方がここまでこれを持ってきてくれたもの何かの縁です．．
愛美の為にもお願いです．．』

『．．．』

ジャニスはベットまで戻った

愛美の母は手紙を開封した

「カサ・・・」

『分かりました・・・』

ジャニスは手紙を受け取り読む事にした

『愛美ちゃん、聞いててね・・・』

愛美の母は涙ぐみながら言った

「愛美、元気でやっているか？お前が気にしている芸能の出来事の件は最善を尽くし

事態を納めた、今は自分の体の事だけを考えてしっかり治療してくれ。

最後こんな形になってしまった事を本当に申し訳ないと思う、お前が成し遂げたかった夢まで潰してしまって

本当に申し訳ないと思っている・・。

この手紙と一緒にお前から預かっていたお金を全て返す。

迷惑をかけた分、少し余分に金を入れておいた。

今の俺にはそれくらいしか出来ない。

今後、きっとその金は役に立つ筈だ、自分の為に使って欲しい。

もし・・・お前が望むのなら退院した後「HEAVENS CAFE」を訪ねるがいい。

そこでもう一つの選択肢が出来るだろう。

それも選ぶのはお前だ

強くなるうと必死に頑張っていてくれた、愛美、お前を俺はとても好きだった。

ありがとう。 愛美

哀川 京介

┐

手紙を読み終えると、愛美に異変のようなものを感じた

目は泳ぐように動き

口をパクパクさせていた・・

『どうしたの？何か 何か言いたいの！！愛美ちゃん！！』

母親は愛美に覆いかぶさるようにし、体を少し起こしていた

ジャニスは哀れな姿だと感じ・・・

背を向け、部屋を再び出ようとする・・・

『待つ・・・て・・・』

愛美が言葉を発した・・・。

o

「誕生」 7

『待つ・・・て・・・』

ジャニスは足を止め振り向いた・・

意識の無いはずの愛美がジャニスの方を向いていた

愛美の母は驚いき、愛美に縋りついた

『愛美ちゃん！愛美ちゃん！分かるの？お母さんよ！ねえ 愛美ちゃん！！』

愛美は母親の手を握り静かな笑みを見せた

『あ．．の．．人を．．』

『うん、うん』

『何か伝えたい事がある見たいです、お願いします』

『．．はい．．』

母親はジャニスに愛美の近くに来るように頼んだ・

ジャニスは目を疑いながらも愛美を見つめた

『愛美ちゃんこれでいい？』

『あり・・・が・・・とう・・・』

『俺の事が分かるのか・・・てんてん（愛美）・・・』

『・・・じ・・・じゃ・・・にす・・・さ・・・ん・・・』

「・・・一・・・体・・・どう言う事なんだ・・・」

『き・・・きょうすけ・・・さん・・・キラ・・・さまあ・・・』

「何故・・・あの状態から・・・手紙なのか・・・京介さんからの言葉が
そうさせているのか・・・」

『・・・京介さんは・・・』

愛美の母はジャニスの腕を掴んで横に首を振った

「ここで愛美の希望を失わせたくない・・・そう言う事が・・・」

『愛美ちゃん。あなたのお腹の中に、その京介さんの子供がいるのよ……』

愛美の表情が止まった

目覚めたばかりの意識に京介の子供が宿っている現実を突きつける事は何を意味するのか……

愛美の覚醒を促すのか……

それとも……破滅への道しるべになるのか……

『子供・・・京介さんの・・・子供・・・』

ジャニスは親子のやり取りを聞いていた・・・

この目覚めには意味があるものなのか・・・

愛美の妊娠は何を意味するものなのか・・・

ただの快楽的な行為の妊娠であれば、今までに「綾瀬 千佳」です

らありえた筈だ・・

愛美が妊娠をどう捉えるのか・・・

意識が目覚めが彼女を普通の状態へ導くものなのか・・・

傀儡の呪いのようなものを感じた・・

愛美は自分のお腹を摩り、嬉しそうな顔をしていた

『産むわ．．私．．京介さんの子供を産んで、彼が迎えに来てくれるのを待つわ．．．』

『．．．愛美．．ちゃん．．．』

『．．．』

愛美は自分の意思を伝えると、また静かに目を閉じた．．．

『愛美ちゃん？愛美ちゃん？』

『お母さん・・・久しぶりに目が覚めたせいか・・・疲れたの・・・少し休ませ・・・て・・・』

『・・・うんうん・・・』

母親は愛美の頭を優しく撫でていた

愛美は母親の手の中で眠りについていた・・・

母親が一つのキーワードだったのか・・・

京介が残した、最後の傀儡「てんてん（愛美）」

日本全国で愛された女・・・

そしてメディアに衝撃を与えた女・・・

今までに無いくらいの大打撃と惨劇のキーマンだった愛美・・・

「京介さんが・・・俺に託すと言うのか・・・」

ジャニスは二人をそっとして病室を出た

その後・・・

愛美はあの日以来、身体の状態は良いが目を覚ました様子はなかった・・・

愛美は子供を本当に産むつもりなのだろうか・・・

あの時の愛美の目覚めは一体何を意味していたのだろうか・・・

ジャニスは本部事務所のPCモニターから愛美の様子を見ながら

多数の疑問とこれからの事を考えた・・・

残された者がしなければいけない事・・・

妊娠に京介は気づいていたのか・・・

ほっておけば良いものでもあった筈だ・・・

それをワザワザ俺に出向かせた意味・・・

それもこれも・・・ただの偶然だと言うのか・・・

「何れ・・・彼女が目を覚ました時に・・・全ての始まりか・・・終わりの答えがでるのだろう・・・」

o

傀儡外伝 「誕生」 完結

モニターを眺めるジャニス・・・。

「どうしたのか・・・」

それから数カ月が経ち、日増しに愛美のお腹は大きくなっていった。

それから ジャニスは一度も見舞いに行く事もなく

時よりモニターで愛美を眺めていた。

愛美がそのまま目覚める事は無く

お腹の子供もともに生まれてくる事は無い・・

そう考えていた。

京介により投与された「Xドラック」は人体への影響も大きく

今までにまともな形で終局を迎えた人間など一人もいないのが現状だった・・・。

「なににせよ・・・まともな形では終われない・・・か・・・」

・ ・ ・ ・ ・

更に数カ月が経った・・・

『愛美ちゃん！頑張るのよ！！』

ベットのまま手術室に運ばれる愛美の姿があった

「ガラガラ・・・」

無意識のまま、愛美は出産を迎えようとしていた

「ボタン・・・」

手術室の扉が閉まった

「しかし・・・こんな姿で子供を産ませるなんて どう言っ神経してるんだ？あの母親は？」

「全くですね．．でも この状態で よく臨月まで．．．」

手術室で医者とナースが言っていた．．

医務室．．．。

『お母さん、本当に産ませるのですか？』

『お願いです、お願いです、これがあの娘の願いなんです!!』

『しかしですね・・・体は健康でも・・・五体満足で生まれてくるとは限らないですよ』

『いいえ、あの娘は立派な子供を産みます！先生どうかお願いしま

す
『

『・・・母体が耐えるとも言いきれませんが・・・子供も・・・それでもですか？』

『お願いします・・・うっうっう・・・（泣）』

『分かりました・・・当病院では責任は取れませんからね・・・その事を承諾してください』

『はい。よろしくお願いします。』

『・・・出産は帝王切開で行います』

数ヶ月前の医者との会話が愛美の母の脳裏に浮かんでいた・・・

『頑張るの・・・愛美・・・』

母は両手を組み天を仰いだ・・・

数時間後・
・
・

手術室のランプが消えた

「ボタン・」

「先生！！！」

医者は少し納得出来ない顔をしながらも母親の肩をポンと触った

『お母さん、母子共に無事です』

『あああ・・・先生・・・ありがとうございます・・・』

『娘さんの意識が戻るかどうかは・・・』

『・・・はい・・・』

愛美は病室へ生まれた子供保育器へ入れられた・・・

その後も愛美は目覚める事は無く数日間が過ぎて行った・・・

やがて子供は母親の元へと運ばれていった

『子供は無事に大きく育ってるわ、愛美ちゃん・・・男の子よ』

『ほら、お母さんよ・・・』

小さな子供は愛美に近づけられると大きな声で泣き始めた・・

「オギヤー！オギヤー！」

子供はどんなにあやしても泣きやまなかった

「オギヤー・・・」

愛美の指が、子供の声に反応した・
・

「ピクッ・
・」

HEAVENS本部でジャニスもその光景を見ていた・・・

「・・・ん？・・・」

愛美の目が静かに開いた・・・

『あああ・・・愛美ちゃん・・・あなたの・・・あなたの子供よ・・・』

愛美は子供をぼんやり見つめた・・・

ゆっくり両手を差し出した

首の座らない子供を抱きかかえ

乳房を出し乳を飲ませ始めた・・・

『あああ・・・愛美ちゃん・・・良かった　良かったあ・・・』

母親は涙を流し奇跡を喜んだ・・・

一生懸命乳房を吸う子供の顔を見ながら愛美が言った・・・

『・・・私・・・私だけの・・・』

『そうよ、あなたの子よ、愛美ちゃん』

『京介・・・この子の名前は京介・・・ああ可愛い・・・もう離さない・・・絶対に離れないんだから』

『ちよっと・・・愛美ちゃん？』

『これからもずっと一緒よ、京ちゃん・・・ああ・・・私だけの京ちゃん・・・私だけを見つめて、私だけを大事にするのよ』

愛美の意識は元の姿では無かった

慌ててナースコールを押す母親の姿・・・

子供を京介と呼び抱きしめる愛美・・・

病室に駆け寄り、看護婦と医者・・・

愛美は子供は無事に産むことは出来たが・・・

出産した事により精神的に崩壊を迎えたのだ・・・

「パチン」

ジャニスはリアルタイム映像のモニターを消した・・・

「・・・傀儡の呪縛は解けずか・・・」

無間地獄は永遠に続く・・・

生命に宿り・・・次々へと侵食する・・・

「行く末が・・・楽しみだな・・・」

ジャニスは不気味な笑みを浮かべた・・・

傀儡外伝

『誕生』

完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2536v/>

「傀儡外伝」

2011年9月8日14時49分発行